

史遊会通信

No.231号
平成26年
5月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

四月講演要旨

キリシタン大名 高山右近……殉教まで

鍋屋次郎

一、高山右近はどうしてキリシタンになったか

高山右近が十二歳の頃、松永弾正のところに日蓮宗の僧侶から、バテレン(キリスト教宣教師)を国外追放するために、バテレンを宗論で論破して日本に居られなくなるようにしようとの計画が持ち込まれ、結城山城守、公家の清原枝賢にその実行を依頼した。たまたま結城山城守のところに信仰歴の浅いキリシタンが訴訟案件を持ち込んできたのでその人たちにキリシタンの話を聞いたところ、もっと詳しく聞きたいと思ったのでバテレンの来訪を依頼した。

その後四十日くらい経過してから、堺からバテレン(ロレンソ)がやってきて数日間キリシタンの話をした。その場所に高山右近の父高山飛騨守(当時大和沢城を預かっていた)も来ていて、その場で結城山城守と高山飛騨守は洗礼を受けた。宗論で論破する目的が反対になってしまった。

高山飛騨守はその後バテレン(ロレンソ)を沢城に招き、家族・家臣にキリスト教の話聞かせ、右近も含む家族全員と多くの家臣がその場で洗礼を受けた。

その後、高山父子は荒木村重の配下で高

例会のお知らせ

◎ 五月例会

日時 平成二十六年五月二十八日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 高橋正彦氏

テーマ 年輪・放射性年代法に関する

科学データの信憑性

六月号自由執筆 高橋正彦、太田精一、

森下征二の諸氏 締切五月末

◎ 六月例会

日時 平成二十六年六月二十五日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 平山善之氏

テーマ 続日本紀・二つの「なぜ？」

七月号自由執筆 佐藤健一、村上邦治、

漆原直子の諸氏 締切六月末

槻城主の和田惟政に仕えていたが、和田惟政の死後、惟政の息子惟長が城主となったとき、高槻城内派閥争いから惟長主導で高山父子暗殺計画が持ち上がり、それを知った高山父子は城内での会合の時に逆に惟長とその一党を殺して、荒木村重から高槻城主を認められ、その直後に右近が父飛騨守に代わって城主となった。右近はこの時二十一歳。

暫くしてイエズス会本部からカプルル神父が日本での布教状況の視察にやってきて高槻城に滞在した。右近父子はカプルル神父からキリスト教教育を受け、キリスト教の教えを城主の行うべき規範とした。

二 荒木村重事件

天正五年（一五七八）、荒木村重は織田信長から毛利攻めを前提として摂津の守護となっていたが、信長との約束を破って毛利方に寝返った。そこで織田信長との戦いとなり、信長はバテレンを使って右近に対し高槻城明け渡しを迫ってきた。そのとき、右近は妹と三歳の息子を荒木村重の居城有明城に人質として出していた。一方、信長は「明け渡さなければバテレンを皆殺しにする」と強硬に明け渡しを迫り、父飛騨守はどこまでも主君である荒木村重に同調す

るという。右近はキリシタンとして神に祈り続けた結果、一人城を出て、剃髪し、身に寸鉄も帯びず、紙子一枚を着て信長の下に行った。

驚いた信長はその場で右近に高槻城城主を安堵し、二万石の加増を行った。やがて有岡城は落城、幸い人質の妹と息子は助けだし、バテレンは一人も殺されることなく落着した。

その後、右近は秀吉の配下となり、島津征伐(九州平定)に従軍し、秀吉の率いる征討軍の先鋒として総指揮をとって軍功は著しかった。

三 右近追放

天正十五年（一五八七）六月十九日、凱旋して博多宮崎宮を本陣としている秀吉から、右近に対しキリスト教棄教命令とバテレンに対し追放命令（二十日以内に日本から出て行け）が出された。

右近は死を覚悟して棄教命令を二回に亘って拒否、ついに領地召上げ、追放となった。バテレンは平戸に集結した。この間、小西行長や蒲生氏郷などのキリシタン大名が「一緒に謝るから、表面だけでも棄教できかないか」と言ってきたが、断り続けた。

そして小西行長の領國小豆島に避難し、

小西行長の肥後宇土への転封に伴い一旦は宇土に行くが、その後、加賀前田家の客将として加賀で二十五年間を過ごした。何故右近が加賀へ行ったかについては諸説があるが、右近がキリシタンとしての信仰生活を行う上において、秀吉と小西行長との力関係から小西行長にいつまでも匿ってもらう訳にはいかない。秀吉の最も親しい大名は前田利家であり、前田利家のところで堂々とキリシタン信仰生活を送りたい、と考え行動を起こした結果、おそらく前田利家が秀吉の了解のもとに、右近を客将として招いた(受け入れた?)ものである。

右近が加賀に在る間に、ときのローマ教皇シスト五世から右近のキリシタンとしての生き方に感状が贈られたことは、日本人キリシタンとして特筆に値する。

四 右近と侘び茶

右近は千利休の高弟であり、利休七哲の筆頭格であった。また七哲の五人までがキリシタン大名であったことは何を意味するのであろうか。確かに禅思想から禅の美の根底にある「不均斎」「簡素」「自然」「幽玄」「静寂」「無」「一期一会」などの侘び茶の精神は、キリスト教の教えとかなり近接しているものであり、右近が茶室を祈りの場

所としていたのは、キリスト教の「靈操」と全く同質のものであった。

そこに千利休の侘び茶の世界に、利休七哲の中に五人のキリシタン大名が名を連ねていることが理解でき、更に言えば、この五人の美的感覚や価値観は利休と通ずるものがあり、「秀吉の権威の上に胡坐をかいた金の茶室的センス」とは相いれないものを持つていたものと思う。

五 マニラへの追放

慶長十八年（一六一三）十二月、江戸幕府より前田利家宛て、右近と内藤如安のマニラ追放命令が届く。右近夫妻と娘ルチア（家老横山康玄と離婚して右近夫妻に同行）、長男の五人の子どもと共に長崎に向かう。内藤如安夫妻も同行。加賀藩では駕籠を用意したが右近は辞退。近江坂本で三十日留め置かれた。それは右近の処置（ここで処刑するか、江戸へ送るか、長崎に送るか）についての江戸の指示を待って、結果は船で長崎へ送られた。

慶長十九年（一六一四）十月八日、狭い船でマニラへ出航。船足は遅く、十一月十一日、マニラ湾に入った。岸壁には総督やイエズス会の人々が大勢出迎え、港の砲台からは祝砲が轟くなど、信仰を全うした右

近に対し凱旋將軍を迎えるような歓迎ぶりであった。

右近は長旅の疲れから高熱を発し、翌慶長二十年（一六一五）二月三日天に召され、葬儀のミサは九日間行われ、市民は殉教者に対するように、右近の足に口づけし別れを惜しんだ。

スペイン政府は右近の滞在費等を政庁で持つことを承認し、その通知は右近の死後届いた。右近の銅像は日比友好公園に今でも建っている。

五月講演要旨

科学論文におけるデータの信憑性について

高橋 正彦

…素データを全く示さない科学論文が、公然通用する現状にどう対処すべきか

本邦年輪年代に関するこの問題を解くため、広く欧米の類似問題を参照した。欧米では気候復元・急激温暖化(ホツケ・ステック説)の説明が年輪研究の主流であるが、業界有力な英 CRU(気象研究所)の〇八年論文に

疑義があり、二〇一三年、問題論文の素データを結局公開せざるを得なくなった時点で所説の「現世急激温暖化説」は実質崩壊した。(是れは論文が不明瞭なデータ操作をしていた事を暗に認めたことを意味する。)年輪科学にはこの様に、虚偽が公然通用する、計算過程・データの不透明性がある。是を解く為には主張を外形的に解明する以外の方策はない。外形的な手法とは……

イー本来独立関係にある放射性炭素濃度(Δ14C)との相関性から年輪幅変移を定義、ロー年輪パターンの要所を絶対年代で定義、

ハー世界的気候変異との外形的相関は、本邦年輪パターンの特異部分に信憑性を与える

ニー不利益容認の論旨(温暖化論の顛末)には 真実の暴露がある…等々、科学的論理より は、むしろ訟務的手法を取る以外にない。

結論…本邦年輪年代は紀元五三六年以降に付いては根拠があるが、歴博のそれ以前の炭素年代論の基礎としては信憑性がない【巻向遺跡の年代確定には、絶対年代を含む年輪データの独自収集が必要である】

自由執筆

雀神社

柴田弘武

過日地元のグループと古河市を訪ねた。

そのとき雀神社という珍しい名の神社に案内された。境内の巨木はいかにも古社の面影を伝えている。古河市の建てた案内板に「鎮宮が転化して雀宮となった」とあった。私はこれを見て少し安易過ぎるのではないかと思わざるを得なかった。

というのは、私は元本会会員の相原精次氏の著書『みちのく伝承―実方中将と清少納言の恋』（彩流社）を読んでいたからである。そこでは宇都宮市雀の宮一丁目にある雀神社や京都市左京区静市にある更雀寺（きょうじゃくじ）などを取り上げ、実方中将が雀に生まれ代わったという伝承を分析して、一種の産鉄伝承であることを明らかにしているからであった。

宇都宮の雀神社の祭神は素戔鳴命・藤原実方。社伝によれば長徳元年陸奥守に任じられた藤原実方は、下向の途次当地で休憩してから陸奥に向かった。妻の綾女も実方

を追って当地へ来たが、病死したので、その遺言で持っていた宝珠を埋め、そこに社殿を建てて産土神として祀ったのが創始という。その後同三年九月に実方も陸奥で死んだが、その靈魂が雀となって飛び来たり、神祠に入って奇瑞を示したので雀宮神社と称し実方を祀ったという（『角川地名大辞典』）。

また別の伝として、「饅頭に針がしのばせてあるのを知らずに食って苦しんでいた男が、庭の雀を見ていて、雀が同じように苦しんでいる友雀に葎を食わせて、小針を取り出させていたのをヒントにして、自分も試みたところ針を取り出すことができた。これによって救われたので感謝して雀を神として祀ったのである」というものがある。京都市の更雀寺の伝説も陸奥で客死した実方の霊が都恋しさに雀になって飛んできたというものである。

相原氏は実方が「歌枕探して参れ」と命じられたその「歌枕」とは何であったかと問うて、実方が奥州下向の途次詠んだとき「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらすな燃ゆる思ひを」の歌を分析して、「いぶき」は栃木市吹上町のもぐさの

産地である伊吹山であり、「伊吹」は「息吹き」でフイゴの風、「燃ゆる」は鉄を溶かす意があり、それにひっかけて清少納言に対する思いを詠ったものであると解釈する。

またその靈魂が雀になったというのは、雀が古く「ささ」と読まれ（『古事記』は仁徳天皇を「大雀」と書いて「おほささき」と読ませるなど）、砂鉄などの微粒な鉱物を意味しているからだとする。

なお宇都宮市雀の宮に隣接して針ヶ谷町という地名があるが、京都更雀寺の近くにも針神社があり、祭神は金山彦である。沢史生氏の『鬼の大事典』に、「ナヅナヅに『一つ目小僧に足一本なアに？』というのがある。答えは縫い針である」とあるが、「一つ目一本足」は産鉄神である天目一箇（あまのまひとつ）神のことである。従って針は産鉄を寓意しているのである。

これらのことから雀神社や更雀寺の実方伝説の背景に産鉄伝承があるという相原説は説得力があると思うのである。

古河の雀神社はこの宇都宮の雀神社を勧請したものという説もある（『古河志』）。しかし祭神は大己貴命・少彦名命・事代主命の出雲系三神である。古河には鍛冶町があ

る。

ところで雀神社はほかにもある。即ち栃木県佐野市高橋町、同堀米町、群馬県太田市植木野町、岩手県盛岡市湯沢、山梨県甲州市勝沼町、兵庫県神戸市東灘区魚崎南町（現魚崎八幡神社、もと雀(ささい)神社)などである。魚崎町の辺りは『倭名抄』の撰津国兔原郡佐才郷で、『平家物語』などにも出てくる「雀の松原」で有名であり、雀がもともと「ささい」と呼ばれていたことがわかる。

さてこれらの雀神社も産鉄がらみの伝承があるのかどうか？ まだ現地へ行つて確かめてはいないが、その匂いはするようである。

佐野市には二ヶ所あるが、佐野市は天命鑄物で有名な町であり、その起源は天慶二年藤原秀郷が河内の鑄物師を移住させたことに由来するという。町の中心部に天明、金井、金屋、金吹などの町名が残る。市域の越名町の鯉名沼は一名タタラ沼ともいい、鎌倉権五郎伝説も残る。堀米町を南流する川名も才川である。「サイ」は「サヒ」で古代朝鮮語の鉄を意味する（鑄びの語源）。

太田市植木野町の雀神社は八幡太郎義家の弟加茂次郎義綱が大治二年（一一二七）に勧請したと伝えられている。ここは旧金井村で、小字に金山前・内金井・金山西・鍛冶街道などがあり、金井はもと金居で、金鑄に由来し鍛冶人の居住していた所という（『角川地名大辞典』）。

盛岡市湯沢の雀神社には「昔この地に温泉が栄えていた頃、一人の巫女が息子に盗みの疑いをかけられたことを恨み、この湯を山をこえて繋まで運び続け、自分は無数の盲の雀と化して作物を荒らした。困り果てた村人達は、神社を建てて雀を祀った。それからは湯の湧出は途絶したものの豊作が続いた」という伝承がある（『角川地名大辞典』）。なお一説に雀は片目であったともいう。片目＝天目一箇神を暗示しているようである。

甲州市勝沼町の雀神社は、『勝沼町誌』によると、甲斐国の古代豪族三枝(さいぐさ)守国が丹後国(もと丹波国)の天橋立から勧請したもので、別名を橋立明神という。三枝氏はもと塩見氏といい、同氏は丹波国から日本武尊東征に従軍して東下し、甲斐に

土着したという伝承を持つそうである。しかし同誌もなぜ「雀」と称したのかは不明としている。ただ三枝の「サイ」は前述のように鉄を意味し、なぜ「三枝」と書くのかについては、ここでは紙幅の関係で書き切れないが、市民古代研究会の機関誌「古代の風」三三二〜四三三号（一九九七〜九八年）で書いたのでそれを見て頂ければ幸いである。甲州は名だたる鉱産地である。

神戸市灘の雀神社についてはよくわからない。鉄に縁のある神功皇后伝説地ではあるが、これは「雀の松原」という地名に基づくような気がする。

なお清水寿氏の『鑄師・鍛冶師の統領と思われる畠山重忠について』という論考には、岩手県田野畑村の畠山神社について、「鍛冶師の信仰するスズメの絵馬が奉納されている」と書かれている。清水氏にその典拠を伺いたいがもう故人になられて聞くすべがないのは残念だ。

ともあれ以上によって、雀神社が産鉄と関連しそうなことは確かに言えるのではないかと思う。

自由執筆

高橋是清に世界地図を渡した男

瀧澤 中

福田赳夫のところに、新しく清和会（福田派）の番記者になった若者が、挨拶をしに行った。

頃は七〇年代。新人番記者は当時の流行で、肩までかかる長髪。

「これから清和会を担当させて戴きます」

長髪の男性記者を一瞥して、福田が例の飄々とした口調で言った。

「ウーム、由井正雪のようだなあ。謀反の匂いがするぞ」

口調は軽いが往年の月形龍之介よろしく、ジロリ、と記者を見据える。記者は翌日、バツサリ髪を切って福田の前に現れた。

「お、いい子だ」

と、今度は孫を見る好々爺。

長髪の若者に「由井正雪のようだ」と言うあたり、さすが「明治三十八歳」の面目躍如である。

そう、福田は一九〇五年生まれで、総理になったのは七一歳。番記者が挨拶に行ったこの時期、すでに老年の政治家であった。

経歴もすごい。福田は大蔵官僚だが、入省三ヶ月後に仕えた蔵相がなんと井上準之助である。

昭和十年。陸軍の予算要求を抑えたい高橋是清蔵相が、川島義之陸相と大議論を展開した「三十六時間閣議」が行われた。この時福田は主計官として閣議室の隣室に陣取り、高橋大臣を補佐。

福田が閣議に必要な事項をまとめたメモを高橋に渡すと、高橋が、

「きょうはメモを持たない。もつと大きな話をする。福田君、官邸のどこかにあるだろうから、世界地図の掛軸を探して来てくれ」

福田の持つて来た世界地図を手に、高橋は閣議室に入った。

高橋是清、八〇歳。三日間にわたり、通算三十六時間に及ぶ閣議で陸軍の要求をついに抑えた。しかしこの閣議が一つの要因となつて、翌年の二・二六事件で高橋は命を狙われる。

ちなみに福田は、大蔵省で陸軍担当の主計官を昭和九年から七年間もやっている。入省五年目の若手が、当時予算折衝で最も大蔵と衝突していた陸軍を担当するのは異例だが、福田は能力だけではなく、度胸も買われたのである。

その後、南京の汪兆銘政権の財政顧問とな

り、戦後は無所属で衆議院議員になった。

吉田自由党全盛時代、二十四人の大蔵省出身議員のうち自由党に属さなかったのは福田一人だが、「光栄ある一議席」と言つて、二回の選挙を不利を承知で無所属出馬。

財政問題で池田勇人と議論して一步も譲らず、田中角栄と血で血を洗う闘争。愛知揆一蔵相急逝を受けて、宿敵・田中角栄から乞われ蔵相となりインフレを抑えるなど、高橋是清を彷彿とさせる手腕は、再評価されている。

平成七年（一九九五）五月。福田が老雄・高橋是清に世界地図を手渡してから六〇年。

福田が提唱して始まったOBサミット（正式名称は InterAction Council）の第十三回会議が東京で行われた。福田は九〇歳になっていたが、病身を押して参加した。ほとんど報道されないが、OBサミットは核軍縮や人口問題で大きな影響力を今も發揮している。しかも数少ない、日本が主導する国際会議である。

当日の福田のやせ衰えた写真が残っている。福田は病院から会議場に行き、その二ヶ月後に亡くなった。

高橋是清に世界地図を渡した福田は、最後まで「世界のフクダ」であろうとした。福田はあの時の高橋との記憶を、ずっと持っていたのかもしれない。

自由執筆

中世のキリスト教伝道

鍋屋次郎

天文十八年（一五四九）、ザビエルの来日によって始まったキリスト教伝道を考えたとき、言葉の壁、文字の壁、印刷の壁があり、来日した宣教師はどのようにして日本人に宣教していたのかが分かりませんでした。

宣教師の来日後、ある程度年月が経過すれば日本人の伝道師や、外国人宣教師の日本語習熟に期待ができませんが、それも人数的には限りがあったことと思います。

そのような状況の中で、一例としてどのようにして高山右近の信仰が深められていったのかを、いろいろな書物の中から考えてみました。

先ず宣教師は一人ひとりのキリシタンの持つべき考え方を説明します。字が書ける人は宣教師の言葉をメモしますが、一般領民などで字が書けない人は暗記して覚えるほかありません。

その一つに「慈悲の所作」があります。これを現代用語に改めて紹介しますと物（身体）についての七つのすすめ
一、飢えている人には食べさせること。
二、渴いている人には飲ませること。
三、はだかの人には着せること。

四、家のない人を泊めること。
五、病氣の人を見舞うこと。
六、囚人の面倒を見ること。
七、死者を葬ること。

魂についての七つのすすめ

一、他人に良い忠告をすること。
二、無知の人を教え導くこと。
三、叱らなければいけない人を叱ること。
四、悲しんでいる人を慰めること。
五、危害（注 自分に）を加える人を許すこと。
六、はずかしめを受けても耐えること。
七、生きている人と死んだ人のために祈ること。

があります。これらには、新約聖書のイエス・キリストの教えが集約されています。高山右近のような人は自分で書きとめておくこともできますが、書くことのできない人には暗記させていたようです。

これを暗記して、毎日のように繰り返していれば、自ずとこの教えが心に沁み渡って、その人のキリシタンとしての生き方が確かなものになっていきます。

当時は日本語に訳したキリスト教の聖書はもとより、現代のような教理の注解書もないわけですから、洗礼を受けてキリスト教に入信した人への教育方法としては具体的に素晴らしい方法だと思います。

その他キリシタンが守らなければならないものとして十戒も教えています。これも広く教えて覚えさせていたようです。

十戒は次の通りです。（現代用語で記載します）
一、あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。

二、あなたはいかなる像も造ってはならない。
三、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。

四、安息日（注 今の日曜日）を心に留め、これを聖別せよ。

五、あなたの父母を敬え。
六、殺してはならない。
七、姦淫してはならない。

八、盗んではならない。
九、隣人に関して偽証してはならない。
十、隣人の家を欲してはならない。

以上も、信仰の教理とキリシタンとしての生き方を教えています。この教えは旧約聖書の時代に、神からモーセを通して民に伝えられたものです。

宣教師たちの宣教活動は、難しい教理をやさしく、信徒の生活の中で定着するように工夫していたので、教育を受ける機会がなかった庶民も、新しい教えを聞いて理解し、キリシタンとしての信仰生活を歩んだものと思う。

自由執筆

韓国セウオル号事件に思う

新井 宏

朝鮮半島西南端に半島本土と近接して存在する島、珍島(チンド)は、珍島犬、海割れ、そして天童よしみの「珍島物語」などで、日本にも良く知られた観光地である。

その中でも「珍島の海割れ」は、今頃の春になると、珍島の東にある回洞里(フェドンリ)という村から海を挟んで向かい側にある茅島(モド)まで、干潮時に幅三十〜四十メートル、長さ三キロメートルにわたる道が現れるという現象で、「モーゼの奇跡」として多くの観光客を引き寄せている。

ところが、今年「セウオル号沈没事故」の自粛ムードで、おそらくひっそりしているであろう。

セウオル号の沈没事故は、まさに珍島に隣接する多島海国立公園の真中で起きた世界を驚かせた大事件である。

まず四月十六日の事故の経過を振り返る。

六八二三トンのフェリー船セウオル(世越)号は、修学旅行で済州島に向かう高校生等の乗客乗員四八六名、車両、コンテナを載せて、霧深い仁川港を十五日午後九時に出港したが、十六日十時十分頃珍島沖で沈没を開始した。死亡者と行方不明者は三〇二名。

当初の報道を時間を追って示すと、八時四十九分過ぎに船が傾きはじめ、同五十二分に轟音と衝撃が走り、少年が携帯電話で消防に第一報、同五十五分に遭難信号が済州島に伝わり、九時十七分にセウオル号から海上交通管制センターに救助を要請、十時十分頃沈没が始まり、十一時頃に全員救助……となっている。

まあ、多少緊張感に欠けるところがあるが、全員救助であるなら、世界の大事事件というほどではない。二年前に起きたイタリアのコスタ・コンコルディアの座礁事故では、乗員乗客四二九九名の内、三十一名の犠牲者が出た。

ところが、生存者数の発表が、とんでもない間違いであった。十一時三十分の一六一名と訂正され、本当の大ニュースとなって世界を駆け巡る。世界から注視されるなか、生存者数は十二時三十分には一七九名、十三時三十分には三六八名と救助活動が、それなりに進んでいる様子を示していた。

急変するのは、十五時三十分の発表である。生存者にダブルカウントがあり、未だ二九三名行方不明者がいるというのである。

混乱時に起こるとは言え、要は人命に関することである。

私は七年ほど前に、黄禹錫教授のES細胞捏造事件に対する国民の行動を詳細に追いかけた経験がある。韓国の国民が黄禹錫教授の

個人犯罪を擁護して、遂に国家犯罪にまで格上げしてしまった愚行のことである。

その経験から言えば、これは単なる事件の始まりだと思った。はたして、その後の展開は予想通り、いや予想を上回る展開であった。

まず、セウオル号が日本製であるとの報道ラッシュである。セウオル号が一九九四年に林兼造船の長崎造船所で造られたのは事実であるが、その中古船を買い取り、五階部分を建て増したのは韓国であり、そのため重心が高くなってしまったことなどは、そっと伏せたまま「日本製」だけがインターネット上を駆け巡る。

日本政府が素早く救援を申し出たが、それを「辞退」したとのニュースは、話題になったとしても、当初は「良くぞ断った」との受け止め方であった。相変わらず、米軍の潜水艦との衝突説、北朝鮮の攻撃説も盛んである。

そこには、韓国の「まず他人のせい」とする風潮が色濃く出ている。しかし、何しろ大事故であり、こんなことで収拾できる話ではない。

次には、新米の三等航海士が操舵を指揮していたとか、代理船長が真っ先に逃げ出したとか、中央災難安全対策本部の右往左往ぶりに批判が集中する。

その過程で、船主側の信じられないほどの無責任さが露呈し始める。

セウォル号を運航する清海鎮(チョンヘジン)海運は、一九九〇年、漢江遊覧船沈没事故を起こし、倒産したセモ海運の後身であった。

客室増設は、貨物積載量を二四三七トンから九八七トンに減らし、船の安定を保つため、バラスト水を一〇二三トンから二〇三〇トンに増加することが条件であった。

ところが、貨物積載は常時二〇〇トン以上で三〇〇トン以上の時も珍しくなかったとの証言が相次いだ。どうして、そんなことが可能であったかと言えば、出港時の検査が、喫水面の高さのみという杜撰さのためである。

要は、過積載分だけバラスト水を減らしていたのである。それでは、船の安定面ではダブルパンチで、単なる過積載よりひどい。

しかも、検査を担当する「海運組合」の主な収入源は、海上保険業務であり、顧客である清海鎮海運の不利になる厳しい検査を課するはずがなかった。過積載が収益源であった。

そのため、正式船長等が船の傾斜しやすい問題点や、操舵の異常をいくら申請しても、会社側は何の手も打たなかった。セウォル号と双子船として就航していた他のフェリーも同じような状況だったという。

このような状況をもたらした原因には、フェリー船の寿命規定を二〇〇九年に三十年まで許容した上に、沿海旅客船に関しては安全管理体制から除外してしまったことがある。

そのため韓国では、フェリー船の多くが中古船となり、安全審査は実質的に運航会社自身によって行われるという信じがたい状況となっていた。

これでは、韓国が海難事故の面で国際的に最下位級の評価を受けていたことは当然である。今回も救命ボートさえ一隻しか使えなかった。これが、中国に次ぐ造船大国、韓国の話である。

もちろん、この事故は、サムソンや現代自動車で「一流国家」を自負し始めていた韓国にとっては衝撃であり「三流国家であった」との自省も現れている。しかし、「人のせいにする」というパターンは止まらない。

まず、乗客を客室に待機させたまま、真っ先に逃げ出した代理船長が吊り上げの対象になった。これを受けて、朴槿恵大統領は「船長は殺人者と等しい」と公言して、検察に「殺人容疑」で起訴するように圧力をかけ、既に船長ばかりでなく、乗組員は全員拘束されている。近代法の禁止する「遡及処罰」を作っても厳罰に処すつもりらしい。

実は、韓国は「遡及処罰」の常習犯で、盧武鉉大統領が戦時中の「親日派」を処罰するため「遡及立法」をしたのは有名である。そればかりでなく、日韓基本条約で、莫大な経済協力と引き替えに対日請求権を一切放棄したはずなのに、戦時徴用者や従軍慰安婦関係

の訴訟を許している。約束を守らない国は「三流国家」に決まっている。

そういえば、数ヶ月前に読んだ韓国の新聞の記事を思い出す。

「冷静すぎる日本と直情すぎる韓国」という題だったと思うが、東電福島原発事故で、日本では一人も刑事責任を問われていない事に、いわばあきれ返っているのである。

韓国なら、「遡及処罰」であれ何であれ、最初に結論ありきで、朴槿恵大統領の発言のように、まず東電関係者数十名に厳罰が当然なのである。朝鮮時代から、政権が交代する度に、過去の失政を咎めて、極刑に処するものが伝統であった。形だけでも大統領を務めた全斗煥や盧泰愚を死刑などの重刑にしなれば、おさまらない国である。法治国家というよりは、西部劇のリンチの世界を思うと良い。

集中攻撃を受けている代理船長にだって言い分はあるはずだ。前の漢江遊覧船沈没事故では、甲板に出て水に落ちたため、多くの被害者を出した。今度の場合も、救助船が集まる前に、冷たい海に放り込まれば低体温症のため死ぬか、早い潮流に流され、捜索が困難を極める。その上、そもそも代理船長には退船命令権がなく、本社に指示を仰ぐ仕組みだった。

もちろん、乗客を置いて船長が真っ先に脱出したのは、厳しく咎められて当然である。

しかし、これも、役割に殉ずる思想に欠ける「韓国文化」にも原因がある。

ここでまた思い出した。韓国の「恨の文化」について友達から尋ねられたことがあったが、その時はうまい回答が出来なかった。今では、こんな回答をして見たい。

韓国の人は、「ひとのせいにはしないと生きていけない悲しみ」を「恨」と表現したのではないかと。

日本を責め、船長を責め、船員を責め、船主を責め、関係者の不手際を責め、政府を責めて、誰かに責任転嫁しないと、韓国では心身が持たない。

そのため、鄭烘原(ジョン・ホンウォン)首相が四月二十七日、辞意を表明した。六月に地方選挙を控え、朴槿恵大統領としては、これ有一段落としたいが、とても収まらず、二十九日には彼女も「第一次の謝罪」を国務委員の前で行った。国民の前でなく、しかも真摯な自己反省を伴っていないと批判がわき上がっている。

それは朴槿恵大統領が自ら撒いたやつかいな問題、すなわち海洋水産部長官人事の不手際も関係している。

朴槿恵が大統領に就任、最初の組閣で猛反撃を受けたのが、経験未熟な女性の尹珍淑の起用であった。知識や理解力に欠け、奇矯な振る舞いもあり、国会の承認を得るのに五十

二日も費やし、海洋行政に空白を生じさせてしまった。その上に、就任後も、しばしば問題発言を起こし、遂に今年の二月に朴槿恵も解任せざるを得なくなってしまった。

その海洋水産部は、船舶安全検査や管理の民間機関である「韓国船級」や「海運組合」に、理事長職や幹部職員を数多く天下りさせていて、業界癒着を防止し得ない体質を持っている。これでは、海洋水産部を強く責めるとブーメランになる。

このように人のせいにして、ひとまず安心するのが「韓国の恨の文化」であるが、それが最も典型的に現れたのが、実は、従軍慰安婦問題なのである。

従軍慰安婦に、国家や軍が関与したか否かによって、「日本のせい」にできるか否かが決まる。単なる「蛮行」のレベルならベトナムにおける韓国軍だって、もつとひどかった。だから、朴槿恵にとっては必死なのである。

「日本が謝罪しないから首脳会談は行わない」と言い続けているのも「他人のせい」にしておけば、とりあえず国民は納得するからである。ここで思考を停止してしまっただけで、大人の議論、すなわち利害調整などできるはずがなく、最終的には、これが韓国の不利益になる。

ただし、言いたいことは、そのことではな

い。韓国の従軍慰安婦として名乗り出た人はわずかに二百三十四名に過ぎず、それも年齢が六十才を越えてからだという事実である。

彼女等が、日本を恨んでいることは間違いないとしても、大多数の従軍慰安婦が最も恨んでいるのは、実は、彼女らを差別し続けて受け入れなかった韓国社会なのである。

マスコミの影響で「日本のせい」と大合唱しているが、心の底では「韓国社会の無情」を恨んでいるはずである。だから心ある韓国人は、従軍慰安婦問題は自分達の恥であり、耳をふさぎたい思いなのである。

何でも「ひとのせい」にして諦める韓国、人災であっても「仕方がない」と諦める日本。

最初は、今月号の寄稿が少なそうなので、一頁ほどの「埋め草」を書いておこうと、セウオル号のメモを作り始めた。しかし、毎日のように「新事実」が報道され、メモがどんどん増え、こんなに長くなってしまった。せっかく書いたので、タイミングもありそのまま載せることにしたが、昨日も朴槿恵大統領の支持率が大幅に低下しているニュースが入り、ソウルでの地下鉄追突事故の報道もあった。

五月三日記す